高知大学共通教育広報誌［パイプライン］

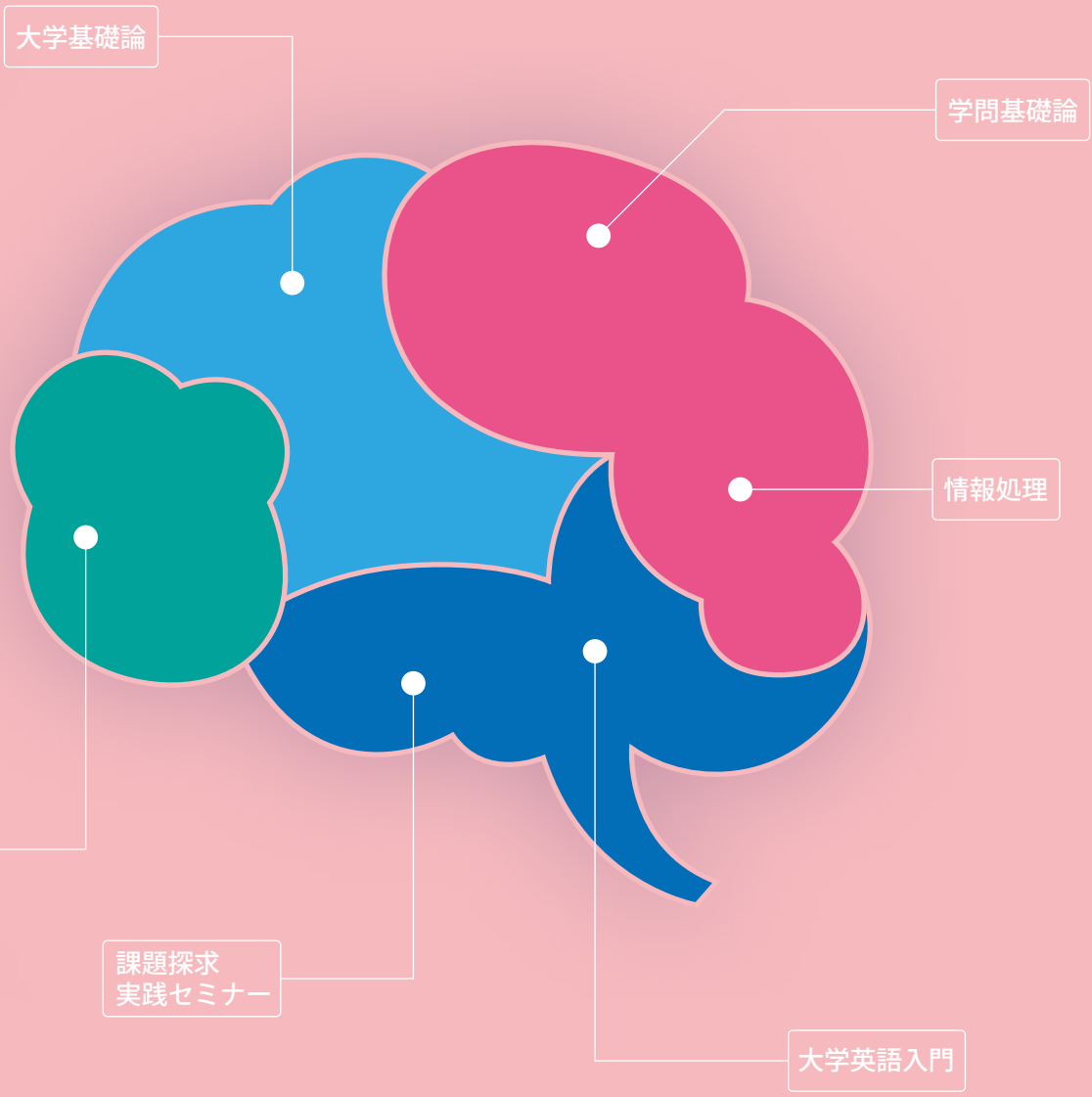
PipeLine

53
2019.3

特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等



No.53 Contents

特集「初年次科目」	P1~10
共通教育自己点検・自己評価部会の活動	P11～12
共通教育実施委員会からのお知らせ	P13

特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、意義、
受講にあたってのアドバイス等

Part 1 ▸ 学生記者から

初年次科目

「共通教育科目」には、「初年次科目」「教養科目」があります。今号ではその内の「初年次科目」を取り上げています。これは、入学後すぐに高校以前の学びの転換を図り、自分で考え行動できる力、他者とコミュニケーションできる力、表現できる力などを修得するものです。

「初年次科目」は、「何をなぜどのように学ぶのか」を学ぶ「大学基礎論」、専攻する学問の輪郭を学ぶ「学問基礎論」、「大学英語入門」「英会話」、「情報処理」、課題探求及び解決能力を身に付ける「課題探求実践セミナー」という必修科目からなっています。

人文社会科学部
人文科学コース
2年

橋口　毬花

初年次科目について

大学という社会の一つの中で生きていく上での必要なスキルを培う。

入学当初、初年次科目は新入生に付くおまけのような印象を持っていた。特に受けなかったとしても、今後に左右することはないだろうと。しかし、実際受けてからというものその考えは大きく変わった。全くの逆である。今後、大きく左右するものであると体中に稲妻が走っていくような感覚を覚えた。

大学では、高校とは違う「受動的な学ぶ」から「能動的な学ぶ」に変化する。高校と同じ感覚で取り組んでしまえば、自己の欲する学びを充分に得ることはできないだろう。自己の学びたい学問のみを真剣に受けるのではない。「学ぶ」というものを形作る初年次科目こそ真剣に受けておくべきなのだ。

初年次科目はおまけなんていう軽いものではない。今後の己の学びへの満足度を決める学びの土台なのだ。その土台作りとして、新入生だからこそ課され、卒業まで無意識に寄り添っている科目であるのだと、今、自分の学びたいという欲を満たしていく中でひしひしと感じている。

人文社会科学部
国際社会コース
3年

高橋　麦帆

初年次科目の中の「大学基礎論」と「学問基礎論」は、大学で様々な勉強をするうえで特に大事な土台部分となる科目です。

大学では授業の成績評価の一つとしてレポート課題というものがあります。私はこのレポート課題を初めて課された時に、レポートというものがどういうものかわからず困りました。そこで、レポートはどのように書けばいいのかということを教えてくれたのが「大学基礎論」でした。この授業ではレポートを書く際に注意しなければいけない剽窃（他人の作成した内容や考えを勝手に使用すること）についても学ぶことができます。

また「学問基礎論」では課題図書を読み、その内容をレジュメにまとめて発表するという少人数制の授業を受けました。最終的にレポートを提出し、先生から改善点などを教えてもらいました。この授業では、他の授業を受けるうえでも必要になってくるレジュメやレポートの書き方を学ぶことができ、今でもその学んだことは役に立っていると感じます。

課題探求実践セミナーでの学び

教育学部
学校教育教員養成課程
3年

石原　央

教育学部の課題探求実践セミナーでは、日頃の授業で学んだ内容を実践で活用することを中心に行う授業です。まず「子ども」とはどういうものかをそれぞれの考えを持てるように学習を行っていきます。その後まず環境ボランティア活動を行います。環境ボランティア活動では小学校に出向き小学生と環境クイズを行ったり、レクリエーションを行いながら子ども理解を深めていきます。また活動の反省を活かし２度目の活動として地域学校ボランティアを行います。この活動では多くの小学生が高知大学にやってきて一斉に活動を行います。初めて大規模で子供たちと触れ合うことになります。そして２回の活動のふりかえりとしてラウンドテーブルを行います。ラウンドテーブルでは活動を通じて印象に残ったエピソードや子供の行動について発表し合い、意見の交換をするといった活動を行います。

これらの活動を通じて教職を目指していくために必要となる子ども観の基礎を築くことができました。

教育学部
学校教育教員養成課程
3年

山村　優貴

フレンドシップ活動では二つのボランティア活動を通して小学生と関わる機会がありました。活動では子ども理解をテーマに子どもとの正しい関わり方、話し方などを学びました。活動後には省察レポートを書きました。そこにはエピソード記述というものがあり、活動の中で実際に子どもと関わる中で起きた出来事を思い出し、その時にした自分の対応を振り返りどのような対応をすることが良かったのかをレポートにまとめました。そうすることで同じ状況が起きたときにうまく対応できるように備えることができました。またこのエピソード記述を日常生活の中で子どもと関わる機会があったときに書き留めることで将来教師になったときに子どもと関わる上で生かすことができます。そして、二つの活動の後にはこれまでの省察レポートをグループに分かれて話し合う活動があり、学生同士でそれぞれの子どもと関わる中でのエピソードを共有することができました。

「教養科目は自分のためになる」

理学部
応用理学科
3年

大本　奈々可

教養科目は、学部・学問を問わず様々な分野の学問を学ぶことができるものである。専門分野を学びに高知大学へ入学した学生にとっては不要なものに思えるかもしれない。実を言うと、私も入学当初はそう思っていた。しかし、実際は教養科目の授業を受講することは自分の専門分野を学ぶうえでも、近い将来社会人として生きていくうえでもとても有効なものであったと感じる。授業を受けたことで様々な知識が身に付き、視野も広がった。このことは自分の専門分野を多角的に見ることにつながる。また、様々な知識を身に付けているということは社会に出ても誇れることだろう。

教養科目の授業を選ぶうえで、「楽に単位が取れる」という点を重視したくなるかもしれない。しかし、先ほど言ったように様々な知識を身に付けるために授業を受けることが大事だと思う。楽なものではなく、自分が興味を持って受けることができる授業を選択することをお勧めしたい。

理学部
理学科
平成30年3月卒業

香川　愛

初年次科目「課題探究実践セミナー」

初年次科目は必修の単元です。いくつかありますが、その中で最も記憶に残っているのは「課題探究実践セミナー」という講義です。なんとこの講義は必修であるにもかかわらず履修する際に抽選があります。この抽選はだいたいの人が抽選に通り普通に履修できるものです。しかし私は落ちてしまいました。いったいどうやって決めているのでしょうか。落選当時は不満を友達にぐちぐちと言っていた記憶があります。仕方なく私は集中講義を取ることにしました。これが大学生になって初めて取った集中講義でした。講義名は「学びを考える」というものでした(たぶん)。講義内容は結構面白かったと思います。グループで簡単なゲームをしたり、売ってみたい商品を考え、そのPRを発表したりしました。短期間で一気に授業があったのでとても疲れましたが、グループワークや発表に慣れることができました。このスキルは社会に出る上で必要でもあるので良い経験になったと思います。初年次科目はグループワーク形式の講義が多いので頑張ってください。

医学部
看護学科
1年

池田　一成

大学基礎論

「大学基礎論」とは、まず与えられたテーマについてグループで話し合い、その後それについて考えたことをいくつかのグループで集まって発表し、意見を共有するという授業です。この授業の魅力的なところは医学科と看護学科が合同で学ぶことができるという点です。例えば、医療に関する同じ課題に対しても医師を目指す者と看護師を目指す者では、着目する点や考え方、捉え方が異なっており、それが私たちの考え方の幅を広げます。考え方の幅が広がれば物事を一つの視点からだけでなく、多角的に捉える力を養うことへと繋がります。また、この授業では患者さんから見た医療、医療者の問題点などを知るために、実際に患者さんに付き添う実習や、医師・看護師以外の医療を支える医療職者の方の講義があり、各医療職の必要性、重要性なども知ることができます。

この授業はこれから私たちが医療を学んでいくにあたり、どんな視点で、どのように学んでいくか、自分の学びに対する姿勢を形成する指標となるのではないでしょうか。

医学部
看護学科
1年

田渕　夢佳

課題探求実践セミナー

初年次科目の一つに「課題探求実践セミナー」という授業があります。課題探求実践セミナーはトピックについて自分たちで課題を見つけ、そこから学びを深めていくというような内容です。それぞれのチームで問題点を見つけ、その解決方法や原因を調べます。そして、グループディスカッションを繰り返し、パワーポイントでの発表、レポート提出などをします。私は、この授業を通じて自ら課題を設定し、解決する力を身に付けることができました。それに加えて、チームのメンバーとコミュニケーションをとる力や、パワーポイント・レポートを作成する力を養うことができ、多くを学ぶことができました。

この授業は、2年次以降の学習や将来医療従事者になった際にも役立つ力がたくさん身に付き、これからの学びにつながる授業です。

大学基礎論と学問基礎論

農林海洋科学部
海洋資源科学科
1年

綿貫　乃愛

初年次科目には「大学基礎論」と「学問基礎論」という授業があります。「大学基礎論」では、大学での学び方を教わり、高校までの授業とは全く違うのだということを実感しました。その後５～６人のグループに分かれてそれぞれの調べたいテーマについてプレゼンを作成します。自分の意見を伝えたり、他者の意見を聞いたりしながら、グループの意見としてまとめていくのが難しかったです。「学問基礎論」では、所属しているコースに関連する論文についてのプレゼンを作成しました。論文を読んだことがなかったので、論文に触れるいい機会になったと思います。これらの授業を通して、「自分から学ぶ」「他者と意思疎通を行う」「プレゼンの仕方」「論文のまとめ方」など、大学で必要な力や知識を得ることが出来ます。ここで経験したことは、その後の大学生活において大いに役立つので、先生方にたくさん質問したり、同級生とたくさん関わったりして、積極的に授業に参加することをおすすめします。

初年次科目の意義

農林海洋科学部
農芸化学科
3年

新居　直人

「何のために、初年次科目は存在するのだろうか。」今回、執筆する機会をいただき、そんなことを考えてみました。なぜ、いくつかの授業を１年次に受講するのか、１年次で受ける理由は何か、その答えはグループ活動だと考えます。初年次科目は大学基礎論や学問基礎論、課題探究実践セミナーなど様々な授業が存在しますが、その多くでグループ活動が行われました。まさに、アクティブラーニングです。私は、グループ活動をする理由として、まず、学習意識の改革があると考えます。小学校から高校までの学習は「教えてもらう学習」でした。しかし、大学からは「自ら動いて学ぶ学習」に変わります。初年次科目のグループ活動はほぼすべてが学生に任せられ、自分たちで調べたいものを調べていきました。もう一つは、社会で生きていく上での能力の基礎定着であると考えます。１年次は周りに知り合いがいない学生がほとんどです。それでもコミュニケーションを取り、グループとして発表を行います。まさにこれから大人になっていくために必要な能力ではないでしょうか。みなさんも初年次科目から大学の入り口を覗いてみてください。

大学基礎論感想

地域協働学部
2年
立野　雄二郎

私にとって大学基礎論は、学内から学外へ視野を広げるための第一歩だったと思う。主に高知県内で活躍している学外の方や、高知大学を卒業し役所などで働いている方をお招きして、体験談やアドバイスなどを聞くことができた。また、各講師のプレゼンが終わった後は、学生が司会となってトークセッションを行った。私は、ほぼ毎回講師の方と一緒にトークセッションを行い、主に「夢」や「希望」など、講師の方が今後何をしていきたいと思っているのかを中心に、質問を行った。最初の講演の中では聞くことが出来なかった深い話を、このトークセッションからは聞くことができ、とても充実した時間を過ごすことができた。現在私は、土佐山アカデミーというNPO団体で長期インターン生として勉強をしている。この土佐山アカデミーとの出会いも、第一回目の講師の方が土佐山アカデミーの事務局長であり、この大学基礎論がきっかけであった。今後もこのような外部の人と大学生が触れ合い、学ぶことができる機会を作っていきたい。

地域協働学部
2年
三谷　七香

課題探求実践セミナー

課題探求実践セミナーは、入学してから初めての実習ということもあり、体験することすべてが新鮮に感じました。

私は、4つの実習地を訪れ、そこに暮らす住民や働く職員の方々とのふれあいを通じて、地域に対する想いや考えなど、様々なことを知りました。特に印象に残っていることは、住民の方の「自分の人生を決めるのは、自分が何に価値観をおいているかが重要」という言葉を聞いて、私自身、将来について深く考えさせられたことです。その言葉の背景にある出来事や想いなどを含めてお話を伺うと、より一層、理解が深まるものでした。また、活動後に記述する振り返りレポートでは、五感情報を中心に振り返るため、活動中は、あらゆる方向にアンテナを張るようになり、新たな発見や気づきが多く得られました。

一つとして同じような地域がない中で、その地の特色や温かさに触れ、学びを得たことで、後期からの本格的な実習につなげられたと思います。

土佐さきがけプログラム
国際人材育成コース
1年
祝　真心

TSP大学基礎論

大学では、高等学校までの学習とは違い、自分が主体となって学びを続けることになる。先生方とは、教えを乞う形ではなく、アドバイスを頂いたり共に考えたりする形で接していく。このような大学の学びの在り方に、自分が今何をするべきか分からず、最初は戸惑いを感じた。そこで、初年次科目である大学基礎論は、大学で何を、何のために、どのようにして学ぶかを改めて考える機会になった。

特に、高知県の課題についてのグループワークは、私にとって、問題意識を持つ大切さを知る貴重な経験だった。小さなことにも問題意識をもてば、そこが学びの発端になり、自分の知識を広げることができる。高知県という課題先進県に属していることを存分に生かし、学んでいきたいと思った。４年間の大学生活で、自分がどうなりたいか、そのためには今何をするべきか、１年生の始めによく考えておくと、そのあと時間を無駄にすることなく過ごすことができる。新入生の皆さんにも、大学基礎論の授業を通し、４年間の良いスタートを切ってほしいと思う。

土佐さきがけプログラム
生命・環境人材育成コース
1年
増田　亜衣莉

初年次科目を受講して

私は、大学１年生の前期で「大学基礎論」という初年次科目を設けることに大きく２つの意義を感じます。まず、大学とその周辺の地域にはどのような繋がりがあるのか考えるきっかけを提供している点です。今回、グループワークとして自分達が考える高知県の課題とその解決策についてまとめました。身近なところから問題は想起され、話し合いを通じて解決策は様々な視点から考えられると再確認できました。そして、大学で学ぶとはどういうことであり、どのような能力を身につけることが期待されているのか、学生が主体的に考える機会となる点です。先程も挙げたグループワーク内容はプレゼンテーションできるようまとめ、九州大学において開催された学際セミナーで発表しました。同じような大学のプログラムに所属して学びを行っている学生同士で意見を交わしたことは、私の中で大学の学びに与えられた可能性について新たに考える時間であったと思います。取り組む姿勢や意識の持ち方で学びの深さが変わってくる初年次科目を有意義に活用することは、その後4年間の大学での学びにおいて質的向上を図ることになると考えます。

特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、意義、
受講にあたってのアドバイス等

Part 2 ▸ 教員から

人文社会科学部

武藤　整司

「初年次科目に寄せて」

小生が大学生だった頃、大学に入って最初に取り組んだ科目群は、「一般教育」という範疇で括られていた。人文科学系、社会科学系、自然科学系のそれぞれ３科目の単位取得が最低ノルマで、その他、体育科目などがあった。３回生になるまで専門科目の受講は制限されており、とにかく「パンキョウ」をクリアーすることが先決だった。当時は５限目という時間割はなく、１日４コマが受講限度だった。ただし、土曜日にも開講されていたので（水曜日同様、午前中のみ）、限度一杯まで授業を受けると、週に16コマだったと記憶している。小生の場合、そのうち外国語科目（英語、独語、仏語）が６コマを占めていたので、放課後はその予習に追われていた。残りの10コマも受講していたので、ほとんど毎日、朝から夕方まで授業を受けていたことになる。受講制限がなかったからできたことであるが、「可能な限り授業を受けないともったいない」という脅迫観念に囚われていたような気がする。

さて、そんな小生の時代とは大きく変わり、現在の高知大学では、卒業後に必要なスキルを学生に身に着けさせるために、さまざまな意匠が施されている。「初年次科目」の設定も、いわば「親心」から出たものであろう。「大学基礎論」では、「大学とはどういう所か」から始まり、学問をすることの意義を問う。「学問基礎論」は、個別科目の初歩を学ばせることによって、より具体的な学問像を学生に摑ませようとするものである。「課題探究実践セミナー」では、アクティヴ・ラーニングを実地体験させ、「大学英語入門」や「英会話」では、英語の基礎をみっちりと仕込む。加えて、「情報処理」には、メディア・リテラシーの初歩を学生に身に着けさせる意図がある。いずれも大事な科目ではあるが、「必修」が多すぎるのが玉に瑕かもしれない。

教育学部

野中　陽一朗

大学基礎論

今回は教育学部学校教育教員養成課程の初年次科目の一つである「大学基礎論」についてご紹介することとします。

「大学基礎論」は、皆さんが大学で学ぶことの意義と目的を理解することを通じ、「教わる」から「学びとる」への学びの姿勢の転換を図るということが大きなねらいの1つとされています。この「学びとる」という学びの姿勢は、当たり前と言えば当たり前のことでありながら、なかなか難しいものなのではないでしょうか。ただ、最高学府と言われる大学であるからこそ、皆さん自身が自律的な学習者となり、自分自身の学びの舵を切って学びを創っていく必要があるのだと思います。そのため、この学びの姿勢がなければ、充実した大学生活を送ることは出来ないでしょう。そうした大前提となる学びの土台を築くことに役立つ魅力的な科目となっています。

教育学部では、4年間一貫した実習系授業を履修する中で子どもたちや教職員・地域の方々と関わりながら、教育に必要なコミュニケーション能力や実践的指導力を身につけることが出来る教育課程となっています。しかしながら、入学していきなり子どもを目の前にし、教師の立場として振る舞うことはとても難しいものです。そのため、教育学部の「大学基礎論」では、「学びとる」への学びの姿勢の転換だけでなく、実習系授業を履修するための基礎的な資質能力を育むため、1)「子どもと遊ぶ」、2)「子ども理解と手遊び」、3)「緊急処置法」、4)「発達障害のある子どもへの対応」、5)「子どもたちと向き合い、導く力：教師の技術」といった複数の基礎講座やグループワークから構成されています。また、「大学基礎論」(理論)を「課題探求実践セミナー」(実践)と連動させ、更なる理論と実践の往還が可能となるよう工夫をしています。すなわち、教職に対する興味・関心を更に高め、教師として必要となる資質・能力の土台を築くものともいえるのではないでしょうか。

理工学部

仲野　英司

課題探求実践セミナー

課題探求実践セミナー(理系クラス)の主な目的は、グループワークとプレゼンテーション(プレゼン)です。授業では、５，６人の少人数グループに分かれて活動し、学生が主体的に課題や解決法を見つけ、最後にそれを発表するという流れになっています。グループワークが苦手な人には辛いかもしれません。私も苦手です。しかし、グループワークとプレゼンは今後２回生以降、卒業研究でも必要になるでしょうから、訓練の第一歩として頑張りましょう。これらはスキルですから、初めは苦手でも、何度か経験するうちに卒業までには上達するはずです。もちろん、社会にでてからも有用になるでしょう。ただ、ここで私が言いたいのはスキルではなく、心構えのようなものです。例えば、プレゼンの資料作りにおいてWeb上や参考資料から知りえた内容を当然の事実ように発表するグループがたくさんあります。授業時間が限られているので仕方がない面もありますが、これは理系の態度としてはダメです。私は高知大学に赴任した当初から８年くらい課題探求実践セミナーの理系クラスを担当していますので、何世代かの入学から卒業までを見ています。その中で、卒業までずっと楽しそうにやっている学生の共通点は、例外なく「経験主義的」だということです。つまり、自分で考えて手を動かして経験しない限りは、理系の学問は面白くないのです。すこし極端かもしれませんが、教科書も教員の言うことも自分で確かめない限りは信じないという態度が理系としては健全ということです。普段、私は理論物理をやっています。好きな逸話があります。昔、イギリス人物理学者P.A.M.Diracが、同僚に「今日は風が強いね」といわれた際、無言で席を立ち外でそれを確認してから「確かにそうだ」と答えたそうです。ここまで「経験主義的」になると変人と言われそうですが、新入生の皆さん、心構えとして見習ってはいかがでしょうか。

医学部
看護学科

池内　和代

学問基礎論を担当して想う

初年次科目の【学問基礎論】を担当して２年目になります。前回は学生が自ら学ぶ姿勢を考える場である【学問基礎論】の目標や授業展開について触れました。今回はそれぞれの講義やグループワークの中で、学生の学びについて、私が感じたことを記します。

【学問基礎論】の授業は健康的な学生生活について学生が自ら考えることから始まります。そして、性暴力の被害者・加害者にならないための点を警察本部の支援活動をされている主任さんからのお話をとおして、大学生活のあり方をもう一度考えてもらいます。次に、人間の健康について、自分自身・家族・地域や周囲の出来事等、身近に引き寄せて考えグループワークを進めていきます。今回は心と身体の健康、そして身体が不自由なことが不健康ではないということに学生自らが気付き、話がどんどん広がっていきました。また我々を取り巻く環境について多方面からまとめ、健康的に生活するための視点として、学生は騒音や公害、労働環境にまで、考えを進めていきました。医師・認定看護師、専門看護師の講義では、将来なりたい医療者としての看護師像について学生はイメージしてくれました。医師、看護師のお話を学生たちは目を輝かせて拝聴していたのが印象的でした。最後は病棟での実習です。はじめて袖を通したナース服に身を包み、学生は不安な表情で病棟に向かいます。この早期実習体験は、それぞれの病棟で学んだ内容をまとめ発表します。半日という大変短い時間でしたが、緊張のなかにも本当に真摯に医療者になるための姿勢を学び取ってくれたような気がしています。

【学問基礎論】は初年次科目の「大学基礎論」・「課題探究セミナー」そして「看護学概論」と連動させながら、学問的関心として理論的、多面的に考える力を学ぶ、はじまりの科目です。【学問基礎論】の授業を基盤として、考える力・表現力、人を思いやる温かい心、等々、高校までの基礎知識の積み重ねがさらに高知大学の教育の中で実を結び、社会で開花してほしいと切に願ってやみません。

農林海洋科学部

深田　陽久

学問基礎論について

今回は当コースの学問基礎論について紹介します。今年度から学部全体で行われる第１回の講義で学生総合支援センター（修学支援ユニット）の教員による「レポートの書き方（ライティング）」が開催されました。それに伴い、当コースでは大幅に学問基礎論の内容を改めました。これまでは、グループワークとプレゼンテーションを中心に行ってきましたが、それらに加え上記のライティングを加えることにしました。ライティングの訓練をどの様な形で取り入れるか考えた結果、科学論文（和文）を利用することにしました。理系でも文章を読んで内容を正確に理解することや、理解したことや自分の考えを正確に記述することは重要です。例えば、当コースでは２年生から多くの実験・実習がはじまり、それぞれにレポートの提出が義務づけられています。実験・実習で得られた結果を正確にわかりやすく記すこと、そしてこれまでの研究との比較をしながら得られた結果を論理的に解説し、結論を導き出すことが必要になります。４年生で行う卒業論文はこれらの総仕上げ、そして大学基礎論は導入科目になったと言っても良いかもしれません。本年度は、はじめに文献（論文）検索の方法を指導し、グループで紹介する文献を選んでもらいました。次に選んだ論文を教材として、論文の要約作成を各個人で行いました。要約はグループ内でお互いに添削し、一番良いものをさらに改善して教員に提出、これを教員が添削する形でライティングの訓練としました。論文の内容を紹介するプレゼンテーション作成も同時に進め、最終的にはクラス全体で要約とプレゼンテーションの相互評価を行い、これを１クールとしました。次の授業で振り返りを班ごとに具体的に行い、第２クールへと繋げました。

科学論文には、必ず研究の「目的」があり、どうしてそれが目的と成り得るのか「背景」があります。「方法」は目的を達成するための手段であり、「結果」は得られた事象を記してあります。そして、「考察」では論文著者自身が得た結果やこれまでの多くの研究成果に基づいて、「目的」に対する答え（結論）が記してあるはずです。この様な文章の構成は、論文に限らず、レポートでも同じです。少し見た目は異なるかもしれませんが、就職活動時のエントリーシートも本質的には似た様なものだと思います。論文というものを上述の様に読み、理解したことを正確にまとめることでライティング能力だけでなく、研究を行うための論理的思考も少しは培えるのではないかと思っています。

多くの講義は学生の皆さんを人間として豊かにするため、より良い人生を送るために、そして社会で活躍できる様に考えられて作られています。学生の皆さんはこれらのことを理解し、初年次科目だけでなく他の科目も積極的に取り組んでください！

地域協働学部学問基礎論の紹介

地域協働学部の学問基礎論は、全学的に見れば若干特殊な位置づけの授業となっていることから、まずその背景を説明したい。

地域協働学部では、専門科目内に、１年次から３年次まで、毎学年末に論文を執筆する地域協働研究Ⅰ～Ⅲという科目を設置している（4年生には地域協働実践・卒業研究がある）。この授業では、1年次からアカデミックライティング等の、論文執筆や研究に関する基本的なルールや技法を学ぶことになっている。このため、当学部では全学的に学問基礎論の重要な構成要素とされているアカデミックライティング等の指導を行う必要がなかった。

そのため、地域協働学部の学問基礎論では、①社会問題を分析し、実践的な課題や行動指針を引き出すための社会科学的素養を育成すること、②構造的に問題を把握するための技法を習得させること、③グループワークを取り入れた授業方法をとることにより、ファシリテーションを始めとした議論の進め方やプレゼンテーションのトレーニングを行うことなどを柱として、授業を運営してきた。①については、学部設置後4年間は、貧困問題の分析や実践的解決の指針を獲得するための理論や現状分析を念頭に置いてテキストを選定した。②については、あらかじめ事前課題としてポンチ絵を描かせた上で、それをグループ内で発表させる方法をとった（初年度は内容の要旨等のスライドによる発表だった）。ポンチ絵を描くことが構造的把握に資するという考え方からである。

これまでの4年間を振り返ると、初年度はテキストが高度過ぎたため、理解が及ばない学生が多く出たが、2016年度以降は、平易なテキストにしたことから、全体に内容把握もしっかりでき、発展的に深めるための議論もある程度可能になったと考えられる。ポンチ絵の巧拙の差はなかなか埋まらなかったものの、構造的把握を行うことについての意識は、多少なりとも定着させられたのではないかと考えている。

土佐さきがけプログラム
国際人材育成コース
前西　繁成

大学基礎論

土佐さきがけプログラム（TSP）の大学基礎論を担当して6年目になります。TSPで行っている大学基礎論の特徴は、学生数が10数名の少人数であること、文系、理系の学生が混ざっていること、また外国に背景を持つ学生が含まれていることです。

毎年それらの特徴を活かすために工夫を凝らしています。入学後すぐに受ける授業のため、まず自己紹介の時間を設けています。例えば自分が育った地域や過去のお気に入りの写真をもって来てもらい、3分間で自己紹介してもらいます。県外からの入学生も多いため、まずそれだけで育った風土や文化の違いを感じることができます。その後、大学の各部門の幹部の方よりお話をいただく機会を設けており、大学の考え方や社会や地域における役割を学ぶことができます。

グループワークとプレゼンテーションは2回実施しています。高校時代にはあまり体験していないかもしれませんが、グループで意見を出し合い、結論をまとめていくことを学びます。最初のグループワークでは、過去に学んできたことや育った環境が違う人たちと議論することの難しさを感じますが、2回目には改善され、相手の話をよく聞き、また自分の意見も相手に伝わるよう丁寧に表現することができるようになります。

本学は新学長のもとで、スーパー・リージョナル・ユニバーシティを目指しています。TSPの学生の多くは、将来や海外協定校への留学や研究などが求められていますが、まずは自分が暮らし、学ぶ地域に関して理解することが重要です。そのため、2回目のグループワークでは、高知の活性化をテーマにしました。書物やネットで調べた情報に加えて、フィールドに出て体験することで、現場に行くことの大切さがわかります。さらに昨年からキャリアに関する授業を2コマ実施しました。将来のなりたい姿を考えながら、4年後のなりたい自分について具体的にイメージをもってもらえればと願っています。

教育の質保証のため、成績評価を自己点検してみよう

大学教育創造センター　立川　明　（自己点検・自己評価部会）

レポートの評価で困ったことはありませんか？

学生にとってはたった一人の授業担当教員、たった１つのレポートですが、教員にとっては大勢の受講生が出したたくさんの紙の山です。成績評価のため、一応目を通さなきゃと思ってみるものの、あまりのできの悪さに目を覆いたくなるものもあったりします。最初は細かくチェックしていても、だんだん慣れてきて気がついたら最初よりだんだん評価が辛くなったり逆に甘くなったりしていませんか？　途中で最初の方を見返したりして・・・

できの悪いレポートがいくつか続いたあとに見る普通のレポートがなんと素晴らしいレポートに見えることか、逆に素晴らしいレポートを見たあとの普通のレポートがなんと薄っぺらに見えることか。先生も人間ですので、このようなコントラストの差による錯視にだまされることは当然起こります。でも成績評価はやっぱり公平じゃなきゃ・・・ネ。では、どうすれば良いでしょう？

授業の目標に関する考え方が変わってきました

古いシラバスを見ると、「この授業で何を教えるか」について書かれた目標が非常に多くありました。本来シラバスに書くべき目標は、「学生」を主語として書くべきでしたが、シラバスが導入された当初、そのフォーマットだけが決められ、内容についてはよく理解しないまま作られていたようです。最近では、授業の目標自体、と言うより授業の考え方自体が「先生が何を教えるか」から「学生が何を学ぶか、何を身につけるか」に変化してきました。そのため表現も「学生が○○を出来るようになることを目標とする」のように変わってきています。学生の皆さんは、何かを出来るようになるために授業を選択して準備をし、授業を受け、成長を実感しているでしょうか。

成績評価の仕方が変わってきました

以前は定期試験のみで成績を評価する授業が多くありました。ところが、学生が目標に掲げたことを出来るようになることが重要になると、成績評価も変える必要があります。例えば、期末試験のみで成績をつけるとすると、一夜漬けで勉強し、試験が終わると急速に忘れてしまうと言うことが起こります。このことは大昔にエビングハウスにより既に実験が

行われて、誰もがエビングハウスの忘却曲線として知っていることです。知識を蓄えることが重要であるなら、毎回予習をし、演習をし、確実に覚えていくと言うことを度々行う必要があります。脳の研究から記憶のメカニズムがわかっていますので、特別な人は別として多くの学生は、○○を覚えるとか、知るとかという目標を達成するためには、授業のやり方自体を変える必要があることになります。当然ですが、成績評価も度々行う必要が生じます。

いろいろな成績評価方法

知識の獲得を目標とする授業ばかりではありませんし、知識獲得のためにも理解することが求められます。授業の目標にも、知ることと理解すること、出来るようになること、身につけるべき態度など複数の事柄が書かれていることが普通です。知識を獲得したかどうかは筆記試験で簡単に測ることが出来ます。知識に伴う理解も筆記試験で測られるかも知れません。技能的な事柄や態度についてはどうでしょうか？　実験や実技に関する筆記試験を作って測ることが不可能ではないでしょう。何かを行う上での望ましい態度についても筆記試験を作られるかも知れませんが、それに正しく答えられたとして、本当にできるかどうかも測れるでしょうか？　本当にできるかどうかを測る方法があるでしょうか？

ルーブリック評価してみよう

レポートの採点の話に戻りましょう。最近よく使われているのがルーブリック評価シートです。１つの目標に対して、100％出来た状態を５点とし、60％出来た状態を１点としてその間の状態を具体的に何ができるようになったかを文章で記述し、いくつかのレベルに区切り、2、3、4の点数をつけます。１つの目標に対して少なくとも１行以上の枠組みが出来、全て５点となったときに100点満点の成績をつけます。１年生には４月に行った基礎力レポートの際に、ルーブリックになったセルフアセスメントシートに書き込んでもらいました。アドバイザーの皆さんは、パフォーマンス評価の際にe-ポートフォリオで見たことがあると思います。なお、必ず５段階にしなければならないと言うことではありません。３段階でもOKです。レポートの評価が全体の40％であれば、満点の評価を40点にします。

レポートにどのように書かれていることが望ましいかを、授業の目標を達成した状態が５点となるように、ルーブリックを作成します。このルーブリックをシラバスにのせ、課題提出前に印刷配布するなどして教員と学生で共有することで、学生は事前に準備することが出来ますし、どのように書けばよい評価が得られるかわかるので、レポートの質がそろってきます。教員にとっては、あまりのできの悪さに目を覆いたくなるレポートが激減し、気持ちよく採点できるようになるでしょう。採点も、ルーブリック評価シートに赤ペンでチェックを入れながらレポートを読むことで、１枚目から最後のレポートまで、ぶれずに公平に評価することが出来ます。学生からの問いあわせ（評価に不服など）の際も、赤ペンを入れたルーブリック評価シートを見せる事ができます。

課題にグループで取り組んだり、グループワークをしたり、何かの手技を修得したり、プレゼンテーションをしたり・・・筆記試験で測ることがなかなか難しい目標も、目標達成した状態を文章で書き表すことが出来れば、ルーブリック評価シートを見ながら学生を観察し、評価することが出来るようになります。ただしグループワークの場合、１人で複数のチームを観察しながら評価するのは困難です。ルーブリック評価も万能というわけではありません。

成績評価を自己点検してみよう

授業の目標を全て達成した状態を100点として評価していますか？　学生が身につけたことに注目していますか？　設定した授業目標のレベルは高すぎたり低すぎたりしていませんか？　単位の実質化は当然していますよね。今一度成績評価が適切か自己点検してみましょう。設定した目標に対して成績評価の方法を考え、シラバスに示した方法と基準を「厳格」に守って公平に評価することが求められます。「厳格」を「厳しく」と読み替える人がいますが、そうではありません。設定した目標と、それを測るために決めた方法と基準にしたがって評価するということについて厳格でなければならないという意味です。決して成績評価を厳しくするとかハードルを高くするという意味ではありません。従って、グループ課題達成のために人一倍頑張っていたとしても、成績評価のためのレポートを出さなかったら成績はつけられません。ただ、最近はいろいろな障害を抱えている学生も多くいますので、複数の方法で成績をつけることが求められます。出来るだけ毎回の授業で課題を課し、少しずつ成績を貯金できる仕組みも求められます。まずはシラバスを書くときによく考えて計画を立て直してみましょう。

農林海洋科学部の深田陽久です。15年前に高知大学の教員となり、今年度はじめて広報部会の委員になりました。パイプライン誌もその間に電子化され、見た目も明るく見やすい構成になったと思います。以前のパイプライン誌に比べると内容も読みやすくなった様に感じます。

ただ、教員や学生の皆さんがどの程度本誌を読んでいるかとなると、少々、不安もあります。恥ずかしながら私も、どちらかというとあまり読んでいない側の教員だったからです。今年度、委員になるにあたり、過去のパイプライン誌に目を通してみると、大学がどんな目的を持って共通教育を行っているのかを改めて知ることができました。共通教育の中でも初年次科目は時代に合わせて大きく変わり、私自身もその対応に苦労した時もありました。特にグループワークの運営には未だに試行錯誤しています。多くの教員は学生の皆さんの人生を豊かにするために、より良い授業を提供しようと共通教育を担当しているはずです。パイプライン誌に教員が執筆した記事の多くには、その想いを強く感じます。15年目にして、きちんと読まないともったいないと思ったパイプライン誌。多くの方に読んで頂けたらと思います。読んだ皆様にはまだ読んでいない方々に是非お声がけをお願いします。

●パイプラインバックナンバー

編集後記

今回の特集「初年次科目」いかがだったでしょうか。初年次科目は、共通教育科目カテゴリーにありながらも、学部ごと、これからの専門科目履修に向けて独自色が持たされたコンテンツとなっています。記事も学部ごとで執筆されているので、新入生の皆さんの修学に当たり、大いに参考にしていただき、実りある初年次を送ってほしいと思います。(S)

高知大学共通教育広報誌［パイプライン］
PipeLine No.53

発　行 / 高知大学共通教育実施委員会
編　集 / 共通教育実施委員会広報部会
〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1
☎088-844-8168（学務課全学・共通教育係）
発行日 / 2019年3月
制　作 / ㈲西村謄写堂

□広報・記事についてのご意見をお待ちしています。
Mail：gm06@kochi-u.ac.jp